

教室を現実の中におく試み

— 内的主体性を立ち上げるために —

出雲 俊江

はじめに 専門高校の生徒の現状から

1 「功利的学習者」としての生徒像

勤務校（広島市立広島商業高等学校）では、高校卒業後すぐの就職を視野に入れて入学してくる生徒がほとんどである。学校としても伝統に培われた職業教育のノウハウがあり、近年普通高校でも積極的に取り入れられている企業インターンシップなども15年以上の実績がある。よって驚くべきことに、ここで一般的なのは、社会人としての将来に備え、資格取得や、社会での必要性を常に意識した学習を行う「主体的な生徒である。フリーターやニートなど、若者の職業意識の低さが問題になっている昨今の状況を鑑みるに、望ましい若者像であるといえる。その後進学に方向転換する者も多いが（昨年度実績 就職42% 四大・短大28% 専門学校30%）、大学進学後も、目的意識の高さと、主体的行動力によって、卒業生は進学先の大学などから高く評価されている。

しかし、日々接する中で、目標を目指してよく努力して

いる生徒であつても、すでに自分自身の人生から降りていけると感じさせられる者は多い。広島県で商業高校へ進学してくる者は、全体の約7%、高卒就職者は13%（うち専門高校出身者は約40%）。はじめから就職を視野に入れて専門高校に進学してくる生徒の抱える現実は、概して重いものである。

学習に目的と結果を求めているという意味でいえば、彼らを動かしているのは、当面の目標である、より条件のよい会社に就職することであり、真に主体的であるとはいえない。彼らは「功利的学習者」なのである。

「どんな仕事でも、思ったよりやりがいがあつて楽しいものよ。」という私に、「先生と私は違うんよ。私ももうそんなんどうでもええんよ。」と笑つて言う生徒らの何割が、将来自分の仕事の意味に気付き、深い意味で仕事に誇りを持つことが出来るようになるのだろうか。

2 「功利的学習者」の問題点

結果や評価の如何にかかわらず、自分を突き動かすものを「内的主体性」と呼ぶなら、「功利的学習者」の問題点は、功利意識のために自らその「内的主体性」を封印してゆくことにある。

その目的達成にかかわらず分野は無駄として認識されるためである。また、必要知識としての基礎教養でない、背景の広がりとしての教養が不足がちであるという傾向も明らかであり、彼らの住む世界が非常に狭く閉じたものであることも想像される。

そうして、「功利的学習者」は、「功利的職業人」になつてゆく。しかし、職業人としての充実も、職業行為が内的主体性に重なつたときにこそ感じられるものであるとするならこの問題は深刻である。

3 「内的主体性」を取り戻すために

生徒を「功利的学習者」たらしめているのは、社会の仕組みはどうしようもなく、自分が何をしても変わらないし、その中で生きてゆくしかないという「社会的枠組意識」と、その中でどう上手くやれば良い就職ができて人より得ができるか、という「功利意識」である。そこから生徒を解放するためには、何よりもまず、生徒自身に、見えない社会の枠組の中でなく、自分に見え、手の届く範囲に働きかけることの力と意味を感じさせることが必要である。それと同

時に、生徒に、評価や結果にかかわらずやりたいこと、興味があることという「内的主体」としての自分の存在や、それが発動している時の感覚を呼び戻すことが有効であると考えた。

では、本校の生徒に「内的主体性」と本当の言葉を取り戻すために国語の授業で何が出来るのだろうか。

ここでは、このような観点から行つた三つの実践について報告する。

実践 教室を現実の中におく試み

生徒にとつて普段授業中に教室で行っていることは、良い就職のための、それに必要な成績を得るための、と切りあはず切り抜けるべき課題という二次的な位置にある。当然授業での言葉は生徒にとつて、それぞれの生徒の生活の場や抱えた現実とは切り離され、教室の中だけのものになる。

しかし、まず、授業において生徒が言葉を用いて表現することや読んで考えることそのものが生活の中で意味を持たなければ、授業によつて「内的主体」を立ち上げることにはつながつてゆかない。

以下の三つの実践は、まず、「教室での出来事を生徒の現実と地続きのものにすること」を第一の目標として行つたものである。

1. 3年生 国語表現「私の小論文」

日頃生徒が行っている小論文の練習は、与えられたテーマに従って意見を構成する営みである。また、そこでは具体例として自分の周辺からその問題に関わる事象を探し出して入れることが良しとされている。

しかし、元々興味のないテーマについて意見を作って述べてゆく練習を繰り返すことは、生徒にとつて、「生徒個々の本来の関心事は、学校（ちゃんとしたところ）では述べらるに値しないことであり、彼らの日々の生活も、テーマのような（立派な）観点から考えるべきである」という言外のメッセージを繰り返して伝えることになっているのではないか。小論文の指導をしつつ、そんな危惧を抱いていたことから、次のような実践を考えた。

〈目的〉自分自身の感想や意見の存在に気付かせる。

自分自身の感想や意見を表現できるようになる。

〈対象生徒〉3年生進学クラス 3クラス（いづれも20名程度）進学を選択した生徒。成績は就職クラスと変わらない。

〈授業時数〉「国語表現」1学期前半週2時間 計約15時間
〈内容〉それぞれの興味関心事をテーマに、日頃感じていることや考えを2000字程度の小論文の形で発表する。

〈手順〉

・テーマを決める 自分の好きなことを複数あげた中から選ぶ。

・資料探し テーマに関する資料を見つけてくる（資料は、好きな記事やパンフレット、写真など何でも良い。）

・コメントつけ作業 探してきた資料をスクラップブックに貼って、それに「私もそう思う」「他にもある」「意見が違う」など、自分の考えを書き込んでゆく。

・好きなテーマで書いても、資料の受け売りに終わりがちであるので、生徒自身の考えを取り出させるための作業である。

・授業時間のほとんどを、このコメントつけのための個別指導に費やした。例えば「あなたは映画のどういう部分に興味を持ったのか」「そのエピソードを聞いて、あなた自身はどう思う?」「作品のどこにそれが現れていると思う?」というような問いを繰り返してゆくと、多くの生徒は次第に資料から離れて自分の考えを書いてゆくようになる。

・文章にする コメントとして書き込んできたものや、そこから生まれた考察をつなげて文章にしてゆく。

・調べて得た知識についての説明ではなく、自分が自分でどう関わりがあるのかを述べることを求めた。

自分の書いたコメントを集め、文章を書き始めた生徒の

多くが、まず初めにいうのは「こんなこと書いてもいいの」という言葉であった。一般の小論文に慣れた生徒たちは、好きなテーマで自分の考えを論じてゆく、ただその立ち位置を見いだすために、個別に何時間もの面談が必要な状態におかれている。

ほとんどの生徒達は、初め2000字という量に難色を示していたが、最後の感想には「意外にたくさん書けた」というものが多く、言いたいことをうまく言えないもどかしさについての感想も多かった。また、どの生徒も自分の言いたいことを表現するための言葉へのこだわりが想像以上に強いことに驚かされた。

表現技術や知識の学習は、先に書きたいことがあつてこそのものであると改めて思い直させられる体験でもあつた。

2 3年生 夏期補習「究極の現代文」

この補習の講座名「究極の現代文」の「究極」とは、講座開講日の前日まで約一週間の新聞記事でテキストを作つたという、時間的な意味での「究極」である。あわてて作つたというのが正直なところではあるが、しかしこれは、国語は現実とは関係ない教科、という生徒の思いこみへの、ささやかな抵抗でもある。

そして、生徒にとっては、権威とそのどうしようもない現実の象徴に思われる新聞の、昨日までたった何日間かの記事の中にも、自分たちの位置について考えるものや、そ

の苦しい現実から脱出するヒントが含まれていることに気付いて欲しいという願いもある。

このわずか五日間の補習において目指したのは、次の二点である。

- ・生徒がその「内的主体性」に関わるものとして職業を捉える視点を持つこと
 - ・読むことや学ぶことが、自分を助け、ひいては自分自身分の人生を語る言葉を持つことにつながる
- 最終日に記事の解説として、働くことも仕事によつて自分を語ることであり、先生として目の前にいる私自身が、教師という仕事を通して語ろうとしている人間であること、というようなまとめをした。

授業の内容は、記事を読んで、読解の手引きのためにつけた小問を解きつつ、簡単に解説をすることのみであつたので、詳細は省略。テキスト掲載記事の一覧を示し、内容説明に代えたい。

「究極の現代文」掲載記事の見出し一覧

◇第一日 グローバリズムのゆくえ 経済の問題から文化の問題へ

「ソニー・独ベルテスマンの音楽事業 EU、統合承認を発表」(朝日7/21) 「日本語コールセンター大連に開設」(朝日7/21) 「ICタグ、日中韓統一へ

共同開発で国際標準ねらう」(朝日7/21)「沿岸捕鯨案を否決 IWC総会日本が提案提示」(朝日7/23)「スーダン政府への制裁検討 米が修正案提示」(山陰中央新報7/24)「仏に学びイメーじ向上を」(朝日7/24)

◇第二日 変化する社会(一) 日本的システム・価値観の変質

「非正社員が3割超える 厚労省調査」(山陰中央新報7/23)「高卒離職者初の5割超 就職3年以内」(フリーター)が定着」(山陰中央新報7/24)「環境改善女性を積極登用」(朝日7/6)「呪縛時、合理に徹せよ(富山和彦)」(朝日7/11)

◇第三日 変化する社会(二) 格差を前提とした社会へ

「ネット、人口の6割普及 情報通信白書低料金携帯が後押し」(朝日7/7)「ネット空間の魅惑 紋切り型現実像崩す 新鮮な視座(西垣通)」(朝日7/9)◇第四日 身近な生活について考える(一) 福祉に目を向けることの意味

「敗者の傷みに優しさを(松島トモ子)」(朝日7/9)「家無き人々支え10年 NY繁華街中心にNPO施設」(朝日7/7)「マイ・バリアフリー(吉井歳晴)」(7/11)

◇第五日 身近な生活について考える(二) 教育

学ぶことの意味

「英語圏などの学習 幼児期、母国語中心で」(朝日7/11)「書評『狭山事件 石川一雄 四十一年目の真実』鎌田慧」(朝日7/19)「84歳学んでます!」(朝日7/6)

3 三年生現代文「井伏鱒二『山椒魚』」

勤務校の生徒らが、彼らの生活の中から受け取るメッセージは乏しく、驚くほど表面的である。そのメッセージの受け取りの貧困は、生徒には社会の大きな枠組みだけしか見えないことにつながっている。まずは、その社会の枠組みの中で、無力感を抱きつつ生きる生徒自身に、自己の存在感や力を感じさせることが必要である。私は、そのために文学と文学の授業は有効だと考えている。なぜなら、もし、生徒の周囲に存在するささやかな出来事や、具体的なモノが、それをもたらした人々とのつながりやメッセージを持つ存在であることを、生徒がもつと感じ取ることが出来たなら、その生徒自身も、自分が小さなモノに働きかけることによって波及してゆく見えない変化やメッセージの力を感じ取ることも出来るようになるに違いないと考えるからである。文学作品に触れ、作者が目に見えるモノを介して語る作者の世界をイメージすることは、生徒自身が、周囲のモノからその背後の意味や関係を感ぜられるようになるための貴重な練習となるはずだからである。

私たちは日頃、様々な身の回りのモノから、それらの持つ意味を感じつつ生活している。校則違反の誰かの茶髪も、その髪型や色に様々な意味合いを感じている。しかし、小説ならばそれは「茶髪」とだけ書かれるか、意味を持つ部分がクローズアップして描かれ、読み手である生徒は、そこからそれぞれの茶髪を具体的にイメージすることになる。その意味で文学は強引である。メッセージだけで構成され、作者の感じたメッセージのとおり自分の中の具体的モノのイメージを立ち上げるしかないからである。

授業で文学作品を扱う場合、私はこの、「モノがあとから来る」という、生活場面とは逆の方向性と、「作者のメッセージを通してしかモノが存在しない」という強引さに意味があるのではないかと考えている。もつと言えば、先にメッセージがあり、そこから具体的なモノを想起させることを強いる文学は、生徒にとつては、荒唐治であるともいえるのではないだろうか。

文学の授業を、モノから意味や関係を感じる練習とするためには、授業を「授業で面白い(面白くない)話を読んだ」で終わらせるわけにはいかない。月並みではあるが、そこに象徴される現実(作者の意図に一致すれば特に良いが、そうでなくても)を、生徒の周囲にも探して、教師がそれをつなげてやる作業をしてやらなければならぬ。

ここにご報告する実践の教材が「山椒魚」なので、いか

にも寓話であり、かえつてわかりにくくて恐縮である。

〔教材〕小説「山椒魚」(井伏鱒二) 三省堂「新編 現代文」
〔授業の形式〕教師の発問に答えつつ、読み進めてゆく。
生徒は、自分の意見を考えてノートに書いたあと、口頭で発表し、討論する。

〔授業の様子〕最後の場面

問「よほどしばらくしてから」のところで、山椒魚は何を考えていただろうか。

蛙をもう逃がしてやろうかと考えていた。

蛙が今考えていることを予想していた。

恨んでいるかも知れない。

今も怖れているかも知れない。

問「なぜ聞いたのか」

友情を感じてくれているかも知れないから。

怒っていることを確かめたい。

責められてもいいから、本当のことを知りたかった。

純粹にどう思っているのか知りたい。

問「自分なら聞くだろうか」

本当の友達なら聞く(ほとんどの生徒)

問「あなたは本当に聞くことが出来るのか」

「私たちは幽閉されていないのか。加害者ではないのか。」

*加害者であることを自覚しつつ、相手を知るために問うことの難しさについて、生徒の生活の中から考えた

こと。

・「先生」(私)も、身動きのとれない毎日を送っている(「幽閉されている」)が、その中で私が生徒にしていること(「加害かも」)をどう思うかあなた達に問わねばならない。

・取り返しの付かないことをしてしまった相手に問うこと。

・在日韓国・朝鮮人(生徒)に問うこと。

おわりに

よく耳にする生徒の声は、「山椒魚の話を読んで何になるのか」「それで結局正しい答えは何なのか」「意見をたくさん発表したら、点が上がるのか」「討論を盛り上げて先生を喜ばせてあげる」などなど。これらは、とりもなおさず、国語をやつて何になるのか、現実的でないだろう、という声であるといえる。

ところで、タイトルに掲げた「教室を現実の中におく試み」の現実とは、厳しい現実の中にある生徒、といった広い意味の現実ではない。生徒が実際に見て触れられる生活場面という狭い意味の現実である。授業においてその狭い現実に没入させることは、一見、厳しい現実から生徒の目をそらすことであるように思われるが、しかし、生徒を功利意識下の学習から脱出させ、実際にその厳しい現実と対峙する力をもたらすのは、実は本当の意味で自分自身が周囲と向き合い、周囲を深く見ることと求めるところの方であると考えている。またしかし、厳しい現実に置かれている

が故に、かえつてそのことが見えにくくなっているのも勤務校の生徒の実態である。

国語が主要教科ではないとされる専門高校における実践の中で、最も問われていると感じるのが授業の意味である。ここにいづれも粗雑な取り組みである実践を3つも報告し、その意図により多く紙面を割いたのは、私の授業の意図そのものを問いたためである。一方「そのつもりならこうすれば」というご教授のお声もいただきたく、欲張りなこともあわせてお詫び申し上げます。

(広島市立広島商業高等学校)